

# イタリア系アメリカ文学とイタリア

マルゲリータ・ガネーリ

「イタリア系アメリカ文学」という表現はなにを意味し、いかなる対象を指し示しているのか。字面のとおりには解釈するなら、アメリカ大陸におけるイタリア系移民、およびその子孫によって書かれた文学を指すと考えるべきだろう。ところが実態は異なる。この名称が含意しているのは、アメリカ合衆国のイタリア系移民およびその子孫によって書かれた文学に限られるからである。「アメリカ」といえばUSA（アメリカ合衆国）のことである、という、この言葉を使う際に付き物の帝国主義的な前提については、あえて言及するまでもない。むしろ強調すべきは、イタリアにルーツを持つ人びとによる、アメリカ大陸のそのほかの地域における文学は、イタリア系カナダ文学、イタリア系アルゼンチン文学、イタリア系ブラジル文学といった具合に、それぞれに固有の異なる名称で呼ばれているという点である。こうしたジャンルは、「イタリア系ディアスポラ文学」という、世界各地のあらゆる「イタリア系」文学が合流する包括的な領域の一部を形づくっている。

アメリカ合衆国のイタリア系アメリカ文学は、そのほかのイタリア系ディアスポラ文学と同じように、イタリア文学のキャンノンに属すのか、それとも、アメリカ文学の、あるいはイタリア・アメリカ双方のキャンノンに属すのか。これは、今日にあってもなお未解決の問題である。多数派の意見によれば、それはアメリカ文学のキャンノンにのみ属すのだが、イタリア・アメリカ双方の文学的伝統に属するという見方もある。いずれにせよ、ここで重要なのは、文学史のなかにこのジャンルの居場所がないということであり、こうした欠落はイタリアにおいてとくに顕著であるといえる。イタリア系アメリカ文学の定義と歴史について論じる前に、アメリカ文学のキャンノンにおいて、また、イタリア文学のキャンノンにおいてはより明確に、このジャンルが長きにわたり周縁に追いやられてきた事実を指摘しておくべきだろう。かかる存在感の欠如については、簡単に例を見つけられる。たとえば、ここ20年間に刊行された、学校向けのイタリア文学史のテキストを検討するだけで充分である。その一例が、ジュリオ・フェッローニによる著名な教科書『イタリア文学史』である<sup>1)</sup>。この著書に、イタリア系アメリカ文学の作家への言及はない（同様に、イタリア語で執筆しているイタリア国内の移民作家についても、フェッローニのテキストは沈黙している）。ロマーノ・ルベリーニ、ピエトロ・カタルディ、リディア・マルキアーニの『著述と解釈』は、ヨーロッパにかぎらず、イタリア国外のきわめて多くの作家を取り上げた学際的なテキストだが、やはりイタリア系アメリカ文学には触れていない<sup>2)</sup>。もうひとつの良い例が、レモ・チェゼラーニの『物質と想像力』である<sup>3)</sup>。これは、80年代に大きな影響力を發揮した非常に革新的なテキストで、90年代の半ばまでさまざまな改訂新版が刊行された。ここにもやはり、イタリア系アメリカ文学作家の痕跡はないのである。

こうした例はほかにもまだまだ挙げられるが、そこから読みとれるのは、イタリアにおける主要な批評家はいまもなお、自分にとって未知の、あるいは、自分が評価していない文学の、キャ

ノンにおける重要性を等閑視しているということである。イタリアには、イタリア系アメリカ文学の研究者はごくわずかしか存在しない。とはいえ、その仕事はたいへん高い水準にある。まず名前を挙げるべきは、ごく最近に他界したフランチェスコ・ドゥランテである。ドゥランテは、記念碑的な著作『イタロアメリカーナ:アメリカ合衆国におけるイタリア人の歴史と文学』をはじめとする、多くの業績を遺している。ほかにも、セバスティアノー・マルテッリやマルティーノ・マラッツィなど、たいへん優れたイタリアニスタがこの領域の研究に取り組んでいる。とはいえ、こうした研究者の仕事は長いあいだ、国民文学のキャンノンをめぐる議論の周縁に追いやられてきた。ここ5、6年のあいだに、状況が大きく変わってきているとはいえ、イタリアにルーツを持つ作家たちを、イタリア文学のキャンノンの内部に位置づけるには、まだ相当な時間が必要だろう。

こうした排除の原因はさまざまだが、ここではひとつの問題を取り上げるにとどめておきたい。それは、「ハイフン付きの文学 (letteratura "con trattino")」の正式な定義をめぐる問題である。あらゆる移民文学が抱える問題や矛盾は、このテーマとかかわりを持っている。ハイフン付きの文学を定義しようと試みるなり、私たちは往々にして、正真正銘のアポリアと、あるいはより穏当な言い方をすれば、ある種の死角と向き合うことを余儀なくされるのである。第一に、移民文学と呼ばれるジャンルには、ある国家および言語から、別の国家および言語への変更を行った作家による著作物が含まれている。ところが、ここで早速、ひとつめの問題に突き当たる。というのも、本人は移住を経験しておらず、両親や祖父母から移住の記憶を受け継いでいる作家たちもまた、ハイフン付きの文学のカテゴリーに含まれるからである。こうしたケース、すなわち、第二世代やそれ以降の世代に属する作家たちの作品では、移住先の国家への同化のプロセスが語られる。ここでいう「移住先の国家」とは、自分が生まれた国であり、自分の第一言語が話されている国でもある。多くの研究者の見解によれば、あるテキストを移民文学と呼ぶためには、その著者の民族的出自を示すだけでは不十分である。移民文学は、書き手によってさまざまな形式が考えられるとはいえ、いずれにせよ移民の記憶をテーマのひとつとして扱っている必要がある、というわけである。要するに、作品は行為としての移民を物語っていなければならない、そうでなければ移民文学のジャンルには含まれない。つまりは、その内容に境界線を定めることで、そのジャンルに作品が入るか、もしくは排除されるかが決まる、ということだろう。イタリア系アメリカ文学をめぐる研究者たちの議論のなかでも、こうした論点は頻繁に俎上に載せられている。

ところが、多くの論者の主張にならって、移住・移民を文学作品のテーマと見なすなり、移民文学と名づけられた領域の境界線を確定しようとする試みは、実質的に無効になってしまう。というのは、移住というテーマが、あらゆる土地、あらゆる時代の文学史をカバーしているからである。恒常的または偶発的な形式のもと、直接的または間接的な手法で移住の経験について書いてきた、現代または過去の作家がすべて、移民文学のカテゴリーで括られることになるのである。問題はそれだけにとどまらない。たとえば、仮に「移民文学」というラベルが、地理的、時代的な限定を伴わずに、ただ単に移住を経験した書き手の作品のことを指すのなら、すべてとは言わないまでも、ほとんどのイタリア文学は移民文学だということになる。政治的

亡命者として、流浪の身に『神曲』を著したダンテが良い例である。広く知られているとおり、イタリアの国語は、イタリア国家統一以前には存在しなかった。いわゆる「言語論争」は、文人たちが言語の選択をめぐる悩ましいジレンマを抱えていたことの証左である。こうしたジレンマはしばしば、鋭い相互対立の所産だった。19世紀まではイタリア国家も、イタリアの国語も存在しなかった以上、アリオストも、ミケランジェロも、タッソーも、ガリレオも、ジョルダノ・ブルーノも、レオバルディも、そのほかたくさんの作家も、みな移民作家だということになりはしないだろうか（事実、ここに名前を挙げた書き手はいずれもトスカーナ人ではない）。こうした作家は多くの場合、小さな都市国家から別の都市国家への移動を繰り返し、ほとんどつねに、自身の第一言語ではなく、第二・第三言語によって著述活動を行っていた。それでも、彼らは通常、エスニックな作家（非イタリア系の作家）と見なされることはない。

移民という概念は、文学の一ジャンルのテーマとしては大きすぎるが、問題はそれにとどまらない。移住・移民は歴史的に見て、古代・近代におけるほとんどすべてのヨーロッパ文学において、決定的に重要な役割を担ってきた。あらゆる時代、とまでは言わずとも、多くの時代区分において、移住という現象は恒常的に発生していた。それに対して、18世紀、19世紀、そして現代における、いわゆる「大規模移民」にアプローチするにあたっては、この現象に適合した特定の手法を採用する必要がある。なぜなら、現代の移民は過去の移民と大きく異なっているからである。

ここで、私たちにとってよりかかわりの深い問題に立ち返ることにしたい。私たちは、アメリカで活動するイタリア人作家を、イタリア文学の歴史のなかで捉えるべきなのか。多くの論者が肯定的な見解を示す一方で、否定的な見解もないとはいえない。

年代的な観点も含めて検討した末に、このジャンルにいかなる定義を与え、いかなる境界線を画するかによって、先の問いに対する答えは変わってくる。この点にかんして、アメリカ合衆国には主に二つの考え方が存在する。

仮に、1880年代に始まった大量移民がイタリア系アメリカ文学の発端であるとするなら、数十年前まで遡ることのできる一部の証言を別として、このジャンルは1900年代初頭に産声を上げたことになる。この見方は、ジェルレ・マンジョーネとベン・モッレアーレが、その名高い著書『ラ・ストーリー』のなかで描くシナリオとは異なっている<sup>4)</sup>。両者は時計の針をじつに3世紀分も巻き戻し、アメリカ大陸発見の日を始点として、アメリカ大陸に移住したイタリア人によるあらゆる文章を「イタリア系アメリカ文学」のカテゴリーに含めている。こうした立場に対して、十分な説得力とともに異を唱えたのが、ウィリアム・J・コンネルとスタニスラオ・G・プリーエゼが編纂した浩瀚な著書『ラトレッジ・ヒストリー：イタリア系アメリカ人』である。目下イタリア語への翻訳が進められているこの著作では、幾人かの先駆者を特定しつつも、文学のみならず、イタリア系アメリカ人の文化やアイデンティティといったものが認められるようになったのは1800年代のなかば、イタリア国家統一と相前後してのことだったと論じている。

イタリアから北アメリカへの移民の歴史を、ここでたどりなおすだけの紙幅はない<sup>5)</sup>。いまはひとまず、イタリア人の大流出が1880年代に始まったということ、そして、最終的にはおよそ半数がイタリアに帰国したとはいえ、移民の人数は累計で2700万人にも達したという事実のみ

を指摘しておきたい。第二次世界大戦の勃発までに、イタリア人にたいする民族的なステレオタイプが広く普及し深刻な人種差別を引き起こしていたこと<sup>6)</sup>や、当時のイタリアがアメリカにとって敵国だったことも念頭に置いておくべきだろう。戦後ようやく、イタリア系移民にたいするマイナスイメージが和らぎはじめ、約20年の歳月が流れたころには、不審は信頼へ変わっていた。これには、イタリア系移民の経済的・社会的立場の変化が反映されている。イタリア系移民はこの頃には、めざましい経済的繁栄を実現し、政治の領域も含め、名声と権力をともなう重要な立場を獲得するにいたっていた。イタリア国外におけるイタリアのイメージは、1950年代後半から変化していく。文化の到達点にして観光の目的地、芸術と文化の揺籃の地、美食の楽園、エレガンスと高品質の同義語として理解される「メイド・イン・イタリアー」など、今日のイタリアを思わせるイメージが徐々に形づくられていったのである。

1920年代から30年代にかけて、イタリアにルーツを持つ何人かの作家が北アメリカにおいて頭角を現し、国際的な評価を得るにいたった。なかでももっとも有名なのがジョン・ファンテだが、ほかにもパスカル・ダンジェロや、『コンクリートのなかのキリスト』という、紛う方なき傑作小説を著したピエトロ・ディ・ドナートの名も挙げられる。マリオ・プーゾやゲイ・タリーズのように、第二次大戦後に有名になった書き手もいる。とくにプーゾの作品は、フランシス・フォード・ Coppolaが映画化を手がけた、かの著名な『ゴッドファーザー』3部作が世界的な成功を収めたこともあって、いまや古典と見なされている。ほかにも、アメリカ国内では確固たる評価を得ているものの、イタリアではあまり知られていない作家の例として、詩人のジョン・チャルディやアルトゥーロ・ジョヴァンニッティを挙げることができるだろう。ジョヴァンニッティはサンディカリストでもあり、やはりイタリア系のジョゼフ・エツルとともに、20世紀前半におけるもっとも著名な訴訟案件に巻き込まれている。あるいは、名著『マウント・アッレグロ』の著者ジェルレ・マンジョーネや、フランシス・ウィンウォーというペンネームで活動した伝記作家フランチェスカ・ヴィンチグエルラ、2019年に齢100を数えた、画家にしてビート派の詩人ローレンス・ファーリングゲッティ、小説家のキャロル・マツ、推理小説作家リザ・スコットリーネ、代表作『鳩を撃つ』で名声を獲得し、2018年に没したジョゼ・リマネッリ、そして、やはり100歳近い高齢(94歳)の、3ヶ国語を操る詩人であり物語作家でもあるジョゼフ・トゥジャーニらがいる。トゥジャーニはイタリア語、英語、地方の方言、そしてときにはラテン語まで用いながら創作に取り組む書き手である。

現代の状況を概観するなら、デイヴィッド・バルダッチ、フィリップ・カプート、2002年にピューリッツァー賞を獲得したリチャード・ルツ、そしてとりわけ、ドン・デリーロことドナルド・リチャード・デリーロなど、広く国際的な成功を収めているごく少数の例のほかに、一般の読者にはあまり認知されていない数多くの作家が存在する。ここ20年のあいだにアメリカでたびたび刊行されているイタリア系アメリカ文学のアンソロジーは、そうしたマイナー作家を精力的に紹介している。たとえば、注目に値するたいへん優れた詩人として、マリア・マッツィオッティ・ジャランの名が挙げられる。2言語を用いた創作のような、イタリア系アメリカ移民としてのアイデンティティの痕跡は、大多数の現代作家と同様に、彼女の作品にも認められない。

あえて単純化してしまうなら、70年代までは、イタリアにルーツを持つ作家たちは受け入れ国の文化の内部から、自分たちの起源について語っていたといえるだろう。そしてそこには、

郷愁の感情を通奏低音としながら、社会の周縁に追いやられていたり、社会にうまく適応できずにいたりする感覚が描かれていた。これらの作家の手になる「イタリア性」はしばしば、クリシェやフォークロアの資料にもとづいて構成されている。その一方で、移住先の文化との対立をもたらす源泉として、あるいは、そうした対立を感知するためのリトマス試験紙として、こうした「イタリア性」が提示されることはない。いくつかの事例、たとえばマリオ・プーゾのケースにおいて顕著に認められるように、かかる標準的な「イタリア性」が、ステレオタイプや偏見を助長して、マイナスの烙印を構築するのに貢献することもあった。イタリア系移民のコミュニティはしばらく前から、こうしたマイナスのイメージを払拭しようと努めている<sup>7)</sup>。

また、70年代から80年代にかけては、系統的・組織的とは言えないにせよ、ひとつの興味深い傾向が認められた。この時代、一部の作家はイタリアという自身のルーツの探求に精力を傾けた。「メルティングポット」や「ニューエイジ」といった概念が流行し、民族的な共同体の価値が再発見された時代において、イタリア系移民による過去の探求は差異の擁護の名のもとに展開された。そうした仕事はまた、行き過ぎた資本主義がもたらす個人の均質化や非人格化に対するカウンターとしても理解されていた。

ヴィート・テーティが、いみじくも「ニュー・エスニシティ（新たなる民族性）」<sup>8)</sup>と定義したこの現象は、イタリアにルーツを持つすべての作家に認められるものではない。すでに80年代には、多くの書き手が、祖先の属していた土地の文化を完全に忘れさせていたのである。典型的な例として、ドン・デリーロが挙げられる。デリーロの両親は、第一次世界大戦の後にカンボパツの片田舎からアメリカへ移住してきた。作家は幼少期と青年期を、ブロンクスの、「イタ公ども」が密集する境界で過ごしており、そのころの記憶は、『アメリカーナ』や『アンダーワールド』といった著名な作品のなかで想起されている。それでもデリーロは、イタリア系作家にカテゴライズされることを拒絶している。のちにあらためて検討するように、多くの論者が指摘するところによれば、アイデンティティの二重性や文化摩擦の問題を取り上げていない現代作家であっても、イタリア系アメリカ文学というジャンルの境界線上に位置づけられることは珍しくない。とはいえ、これは一筋縄ではいかない問題である。というのも、多文化の領域は、そこで使用されている言語にかかわりなく、次の2つの要素に基礎を置いていると考えられるからである。ひとつは、文化の二重性。そしてもうひとつは、苦しみをともなうアイデンティティの自覚を経たうえで、父祖から受け継いできた記憶の中心性である。これらの痕跡が認められない作家をイタリア系アメリカ文学のカテゴリーに含めることは、多くの問題を孕んだ選択であると言わざるをえない。

おそらく現状では、アイデンティティの二重性の問題を明確に作品に反映させ、その構築プロセスを言語化している作家だけが、正統なイタリア系アメリカ文学の書き手として認定される。歴史的に見れば、ルーツの問題や、失われた祖国を回復しようとする切迫した感情が、妥協の許されない要請として具体化するの、ほとんどつねに第三世代においてだった。こうした世代を急ぎ立てている感情はしばしば、抑圧された経験への回帰という形で現れてくる。第二次世界大戦の直前、最中、あるいは直後にアメリカ人として生まれ、大多数が、19世紀末にアメリカにやってきた移民から数えて第三世代に相当するこうした書き手にとって、イタリア系アメリカ移民として受け継いだ遺産について書くことはなによりもまず、劣等感を振り払い

自尊心を回復する歴史的な過程をたどりなოსすことでもあった。第三世代の試みはしばしば、第二世代とのあいだに衝突を引き起こした。第二世代はほとんどつねに、アメリカで生きる居心地の悪さを克服し、アメリカナイズを加速させるために、外国人としての自身のルーツを抑圧しようとしてきたからである。これは、ホミ・バーバ、エドワード・サイードらをはじめとする理論家が「擬態 (mimicry)」と呼んだ現象である。被植民者 (被支配者) は「擬態」をとおして「植民者の習慣・風習を模倣し、あるいはむしろ、植民者にそうするよう仕向けられ、結果として、服従的な地位から脱して」いく<sup>9)</sup>。実際、家父長的家族モデルに代表される、移民の出身国に認められる人類学的風習と、目まぐるしく移り変わる60年代のアメリカ文化の対立が、しばしば世代間の衝突という形で表れたことは偶然ではない。そのために、男性性および女性性の再定義というテーマが、ふたつの世代の対立の大きな争点となった。それは、『ウンベルティーナ』の著者として名高いヘレン・バロリーニのようなフェミニストの作家だけでなく、男性作家の作品においてもたびたび認められた現象である。たとえばロバート・ヴィスコージは、小説『アストリア』の冒頭に置かれた著者はしがきの見事な書き出しのなかで、女性的母性モデルが男性の心理に与える支配的な影響力について、明確に描写している。<sup>10)</sup>

こうした要請に加えて、70年代にはある種の社会心理の問題が浮上してきた。それは、トラウマによる後遺症とでも呼ぶべきもので、間違いなく、この特殊な歴史的状況にかかわりを持っている。おそらくこの後遺症は、多くの論者の主張とは裏腹に、速やかに歴史化されるはずである (この点については、後世に評価を委ねることにしたい)<sup>11)</sup>。著名な研究者ルドルフ・ヴェーコリが提唱した説によれば、70年代とは、民族性の再発見が、個別の共同体の文化的組織化および抵抗をめぐる系統だった研究と一致していた時代である<sup>12)</sup>。物語の結末では、現実の生においてとりわけ否定的に捉えられていた記憶にたいして、肯定的な感情が与えられているように読むことができる。移住にかかわる経験の総体を決定的に乗り越えたいまだからこそ、過去の想起は論争的・政治的な意味合いを帯び、アメリカにおいて支配的なイデオロギーへの批判として姿を現わす。

イタリア系アメリカ文学の定義の問題に立ち返るなら、アメリカ国内では目下、このジャンルの現状は「ポスト-移民」として特徴づけられるという、明白な事実を思い起こしておくべきだろう。イタリア系アメリカ文学の一角をなすうえで、今日において重要視されるのは、英語を母語とする個人のルーツであり、それは程度の差はあれ、書き手から遠いところにある。

アメリカの思想の一潮流として、排除される事例を可能な限り少なくして、全体性・包括性を最大限まで推し進めようとする傾向が認められる。ビル・トネッリは、*The Italian American Reader*と題されたアンソロジーを編纂するにあたって、どのような選択基準を採用したのかを説明しながら、次のように断言している。

テーマは問題ではなかった。そのテキストの書き手がイタリア系アメリカ人なら、そこになが描かれているかとは関係なく、本書に収録される可能性があった。イタリア系であることといっさいなんのかかわりもないような作品であっても、検討の対象とした。移民を先祖に持つことになんらかの意味があるというなら、著者が書いている事柄とは無関係に意味を持つはずだと私は考えたのである。<sup>13)</sup>

アンソロジーに収録された作家のなかには、自分はもはやルーツとのつながりを完全に失っており、イタリアへの帰属意識などひとつかけらも持ち合わせていないという理由で、編者に抵抗を示したものも少なくなかった。トネッリはそうした抵抗について、次のようにコメントしている。「たいへんけっこう。私からしてみれば、それはイタリア系であることのさまざまな様式のうちのひとつにすぎない」<sup>14)</sup>。トネッリの掲げる、この矛盾を孕んだ反-テーマ主義は、作品の内容を民族的な批評の基準にしている多くの研究者とのあいだに論争を巻き起こしている。

トネッリの主張に異論を唱える人びとは、イタリア系アメリカ文学というジャンルが際限なく拡張していくことに違和感を覚えているように映る。とはいえ、生まれと戸籍にもとづく基準（イタリアのルーツとアメリカの市民権という、二つの鍵となる要素に基礎を置くもの）を採用したところで、当のイタリアは、イタリア系アメリカ文学の枠組みから排除されたままである。たとえば、イタリアで生まれ、イタリアで育ち、イタリア語で書いている作家が移民の経験について書いた場合、私たちはどんな判断を下せばよいのだろうか。もっともわかりやすい例が、メラニア・マッツッコの『ヴィータ』という作品である。著者はここで、自身の家族について語っている。とりわけ、20世紀のはじめに、カゼルタの小村トゥーフォから12歳でアメリカに移住した、著者の祖父であるディアマンテという人物にスポットライトが当てられている。ディアマンテと、9歳のときに彼とともにイタリアを離れたヴィータという少女の、胸を締めつけるような恋の物語をメインに据えつつ、歴史と記憶の広範囲にわたる再構築をこの作品は試みている。著者の記述のもとになっているのは、すでに高齢の伯父アメデオをはじめとする一族の証言や、著者自身がエリス・アイランドの文書館で収集した資料などである<sup>15)</sup>。叙述のテーマにかんして言えば、マッツッコの小説は典型的なイタリア系アメリカ文学にきわめて近く、緊密な類縁性を有しており、しかも著者は何度かアメリカで過ごした経験も持っている。それでも、トネッリの掲げる生物学的規定に拠って立つなら、マッツッコは一度も移民としてアメリカに根を張ったことがないがゆえに、この小説はイタリア系アメリカ文学の外部に位置するものと見なされてしまうのである。

問題はほかにもある。仮に、イタリアにルーツを持つ著者が英語で書いた作品をイタリア系アメリカ文学と称するなら、こうしたルーツを持つ当事者は、いつになったらこのカテゴリーから外れるのか。これから先、いったい何世代目まで、イタリア系アメリカ移民というラベルは有効と見なされるのか。時の移ろいととも、新しく生まれてくる子供のルーツはますます混淆の度合いが強まっていく。そして、世代交代が進めば進むほど、その血筋は細かく枝分かれしていく。こうした事実を考慮に入れるなら、血筋を民族的な帰属関係の根拠としつづけることは、問題をなおいっそう複雑にする危険性を孕んでいる。

個々の文学的作品を書くにあたって、移民の血を引いていることは、とりわけ何世代も間隔が空いている場合には、ひとつの判断基準としてあまりにも脆弱であると言わざるをえない。おそらくは、生物学的なライセンスに信用を置くよりも、書き手の生まれにこだわることなく、移民や文化的統合の経験について語っている作品や作家をジャンルの一部に含めるほうが、より賢明な選択であるといえるのではないだろうか。

結論を述べるなら、イタリア系アメリカ文学が今日、絶滅の道をたどっているという認識を

抜きにしては、はじめに提示した問いに答えることはできない。このジャンルは徐々に、より包括的な、イタリア系ディアスポラの文学に取って代わられることだろう。そして、この領域であれば、イタリアにもじゅうぶんな参加資格があるといえる。

事実、近年においては、イタリアとアメリカを股にかける新たなコスモポリタン作家による執筆活動が、質・量の両面において、たいへん勢いを増している。いまや、大西洋の両岸を活躍の場とする遍歴のイタリア人は数多く存在する。知識人のなかにそうした例を求めるなら、イタロ・カルヴィーノ、ウンベルト・エーコ、あるいはすでに言及したレモ・チェゼラーニの名が挙げられるだろう。今日では、アメリカに暮らして執筆に取り組みながら、イタリアにも生活の基盤を置いている大勢の作家集団が存在する。近年における移民とは、もはや一方通行の現象というよりは、構造的な往還運動として捉えられるべきである。パオロ・ヴァレジオは著書『苦しみの王国』のなかで、振り子のように揺れつづける主体が生きて、新しい時代状況を活写している。こうした主体は、あたかも「世界全体がひとつの国になったかのよう」<sup>16)</sup>、二つの、あるいはさらに多くの大陸で生を送る。近年のイタリアをますます苦しめている知識人の離散は、新しく多様なイタリア系アメリカ人、別の言い方をすれば、二つの世界を行き来しつつ生を送るイタリア系アメリカ人の数を、いっそう増大させることになる。したがって、イタリア文学のキャンノンはこの先、好むと好まざるとにかかわらず、グローバリズムに伴う変化を記録しながら、移民やコスモポリタンの作家に対して、よりいっそう門戸を開いていかざるをえないだろう。このようなシナリオを想定した場合、もっとも望ましいのは、たがいに国籍は異なるものの、イタリアという基盤によって結びついているさまざまなディアスポラ文学を対照させ、交差させることで、比較研究を展開していくことである。

ここまでの議論で本稿が明らかにしようとしてきた限界と矛盾を振り返るなら、イタリア文学のキャンノンにイタリア系アメリカ文学を登録すべきか否かは、けっきょくのところで、先に結論として述べた見解につきるといえる。つまり、以下に列挙するような、ともに決定的なふたつの条件が満たされる必要があるのである。1) 第1に、国外の共同体との海を越えた対話において、イタリアが果たす中心的な役割を承認すること。議論の中心にイタリアがいないかぎり、イタリア系ディアスポラをめぐる研究に未来はない。2) 第2に、今日においてはもはや、「Italian/American, イタリア系アメリカ人」という用語をもとに思考することは不可能であると認識すること。むしろ、視野を全世界に広げ、網状に拡張していくイタリア系ディアスポラ概念について考察しなければならない。

いずれにせよ、イタリアにとっては、国土や国籍にとらわれた視点に別れを告げ、国境を越えて文学のキャンノンを拡張させることがますます必要になってくる。かかる国境を越えたキャンノンには、翻訳されたテキストが含まれ得るし、含まれていなければならない。テキストは翻訳によって言語の壁を克服し、ディアスポラによって形成されながらも、これまで人目につくことのなかった共通文化の領域を明るみに出すだろう。国境を越えた展望のもとで、こうした領域は強化され、いっそう成長していくのである。

(栗原俊秀・訳)



注

- 1) Giulio Ferroni, *Storia della letteratura italiana*, Einaudi, Torino, 1991, 4 volumi; Idem, con Andrea Cortellessa, Italo Pantani e Silvia Tatti: *Storia e testi della letteratura italiana*, Einaudi Scuola e Mondadori Università, Torino e Milano, 2002-2005, 11 volumi.
- 2) Romano Luperini, Pietro Cataldi e Lidia Marchiani, *La scrittura e l'interpretazione: storia e antologia della letteratura italiana nel quadro della civiltà europea*, Palumbo, Palermo, 1996-97, sei volumi. その後、9度にわたり新版が刊行されている(最新の版は2009年の刊行)。
- 3) Remo Ceserani e Lidia De Federicis, *Il materiale e l'immaginario: laboratorio di analisi dei testi e di lavoro critico*, Loescher, Torino, 1979, dieci volumi. その後もたびたび改訂版が刊行されている。最後に刊行された版は以下。*Il materiale e l'immaginario. Manuale e laboratorio di letteratura per le Scuole superiori*, Edizione blu modulare, Loescher, Torino, 1996, cinque volumi.
- 4) Jerre Mangione e Ben Morreale, *La Storia: Five Centuries of the Italian American experience*, HarperCollins, 1992 (*La storia. Cinque secoli di esperienza italo-americana*, traduzione di Maria Teresa Musacchio, SEI, Torino, 1996)。
- 5) 最初に参照すべき文献として、以下が挙げられる。Stefano Luconi e Matteo Pretelli, *L'immigrazione negli Stati Uniti*, Il Mulino, Bologna, 2008。本書には、この分野を研究する上で必須の文献リストも含まれている。20世紀半ばまでに、イタリアから世界各国へ旅立っていった移民の特徴や性格について、より包括的な観点から検討した文献として、以下も有益である。AaVv, *Emigrazione. Cento anni. 26 milioni*, numero speciale della rivista «Il Ponte», novembre-dicembre 1974。ただし、より参照すべきは、刊行年の新しい以下の文献である。AaVv, *Storia dell'emigrazione italiana*, a cura di Pero Bevilacqua, Andreina De Clementi e Emilio Franzina, 2 voll (Partenze; Arrivi), Donzelli, Roma, 2001 e 2002; e Donna Gabaccia, *From the Other Side. Women, Gender, and Immigrant Life in the US, 1920-1990*, Indiana University Press, 1994, e Eadem, *Emigranti*, Einaudi, Torino, 2003。
- 6) この問題にかんしては、以下の文献が幅広い観点から検討している。Gian Antonio Stella e Emilio Franzina, *Brutta gente. Il razzismo anti-italiano*, in AaVv, *Storia dell'emigrazione italiana*, cit., pp. 283-311。G. Antonio の手になる文献をもう一点挙げるなら、以下も重要である。*Odissee. Italiani sulle rotte del sogno e del dolore*, Rizzoli, 2004。
- 7) この意味で象徴的なのは、たとえば、複数の著者による以下の論集である。*Beyond the Godfather. Italian American Writers on the Real Italian American Experience*, a cura di A. Kenneth Ciogoli e Jay Parini, University Press of New England, Hanover, 1997。タイトルが雄弁に伝えているとおり、本書はまさしく『ゴッドファーザー』にたいする批判から始まる。「『ゴッドファーザー』は、現実を抹消するイタリア系アメリカ移民の生のイメージを構築したように思われる」(「*The Godfather* seems to have held up an image of Italian American life that has obliterated the reality»), p. xiii。
- 8) 移民の子孫の新たなエスニシティにとっての、「食」のアイデンティティの中心性をめぐるヴィート・テーティの論考から拝借した表現である。Vito Teti, *Emigrazione, alimentazione, culture popolari*, in *Storia dell'emigrazione italiana*, cit., vol. 1 (Partenze), Donzelli, Roma, 2001, p. 594。併せて以下も参照。Idem, *Emigrazione e religiosità popolare*, in AaVv, *Storia dell'emigrazione italiana*, cit., pp. 687-707; Idem, *La razza maledetta. Alle origini del pregiudizio antimeridionale*, Manifestolibri, 1993; Idem, *Il colore del cibo. Geografia, mito e realtà dell'alimentazione mediterranea*, Meltemi, 1999; Idem, *Il senso dei luoghi. Memoria e storia dei paesi abbandonati*, Donzelli, 2004; Idem, con Gian Antonio Stella, *La nave della Sila. Guida al Museo narrante dell'emigrazione*, Rubbettino, 2006。
- 9) Franca Sinopoli, *La valigia delle identità. Memoria collettiva e memoria traduttiva in «Out of Place» di Edward W. Said*, in AaVv, *La storia nella scrittura diasporica*, a cura di Franca Sinopoli, Bulsoni, 2009, p.

231.

- 10) 「これは、ひとりの男によって書かれた、ひとりの女の物語である。本書の著者は、自分の母親の想像力 (imagination) に全面的に支配されている。そこから逃れるために戦っているものの、いつも失敗してしまう。乾いた大地から跳ねあがろうとする、野心に満ちたイルカの姿を思い浮かべてみるといいだろう」。Robert Viscusi, *Astoria, Guernica*, Toronto, 1995, p. 7。本書は1996年にアメリカン・ブック・アワードを受賞し、2003年にはイタリア語に訳されている。
- 11) 明らかに、合衆国の多くの研究者はこの考えにまったく賛同していない。たとえばトマス・フェッラーロは、対立する見解のもっとも熱心な擁護者である。フェッラーロは、おそらくテレビシリーズ「ザ・ソプラノズ」の成功からもヒントを得て、大部の興味深い著作において、名誉、聖母、犯罪性、料理、そのほか多くの要素が、エートスとエトノスのあいだで揺れながら、長期間にわたり存続する様子を再構築している。ただし著者は、「時計の針を逆戻りさせる」つもりは毛頭ないとも述べている。Thomas Ferraro, *Feeling Italian. The Art of Ethnicity in America*, New York University Press, New York e Londra, 2005, p. 1.
- 12) ミネソタ大学の移民史研究所を長年にわたり指揮しているヴェーコリは、「革命的な」第一の著作 (*The People of New Jersey*, Van Nostrand, Princeton, 1965) からすでに、同化の波のなかでイタリア系アメリカ移民のコミュニティが示した抵抗について明らかにしようと試み、世代交代が起きるなかでもかかる抵抗を生じさせるような文化的・人類学的痕跡について研究している。以下を併せて参照。Rudolph J. Vecoli, *Negli Stati Uniti*, in AaVv, *Storia dell'emigrazione italiana*, cit., pp. 55-87.
- 13) Ed. Tonelli, *The Italian American Reader*, p. XIV.
- 14) Ibidem.
- 15) 『ヴィータ』はたびたび、『ウンベルティーナ』と並べて論じられてきた。たとえば以下。Ewa Bakun, *Worlds Imagined and Worlds Experienced: Italians in America in Vita by Melania Mazzucco and Umbertina by Helen Barolini*, Ohio State University, 2004。併せて、メラニア・マッツッコが拙著に寄せた序文も参照のこと。 *L'America italiana. Epos e storytelling in Helen Barolini*, Zona, Arezzo, 2010.
- 16) Paolo Valesio, *Il regno doloroso*, Spirali, Milano, 1983。同著者による、以下の文献も参照のこと。 *The Writer Between Two Worlds: Italian Writing in the United States Today*, «Differentia», Spring-Autumn 1989, pp. 259-276。Luigi Fontanella も、このテーマに繰り返し言及している。文献を一点だけ挙げるとするなら、以下を参照のこと。 *La parola transfuga: scrittori italiani in America*, Cadmo, 2003.